

指導上の参考事項

ぶどうの低収要因とその対策

(園試 大迫試験地)

1 背景とねらい

本県のぶどう栽培面積は670ha余りで、りんごに次ぐ主要果樹であるが、近年(昭和55～58年)の異常気象や栽培管理不良、老樹齢化等が影響し低収益が続いたこともあり、栽培面積の減少傾向を招いた。

そこで本県の主要品種であるキャンベルアーリー(75%)について低収園及び多収園の相違を明らかにし、問題点を抽出するとともに今後の増収対策を検討するために実態調査をした結果、特に栽培管理の不徹底が収量や品質に大きく影響し、栽培意欲を低下させる要因の一つとなるなど問題点が抽出されたので参考に供する。なお土壌、肥培管理も低収要因の一つに観察されるため、現在、実態調査および改善方法を実施中である。

2 技術内容

低収園では、1) 固房率が低い 2) 房重が小さい 3) 晩腐病の多発などが主な要因であり、商品化率(固房率)の向上をはかるため次のことを適切に行う。

- 1) 発芽後の新梢伸長を揃えるため、芽かきは必ず行う。
- 2) 花振いを防止するため、摘心は開花前7日頃に行い、その後は結果枝の生育状況に応じて、誘引、副梢の除去を行い受光を良好に保つなど適切な管理を行う。
- 3) 晩腐病回避のため、袋掛け、傘掛け、ビニールトンネル栽培を行い、又薬剤による適期防除を行う。

4) 樹勢衰弱や天候不順の場合、着房を適宜減らし、樹勢回復または熟期促進を図る。

5) 適応地域 県下全域

3 指導上の留意点

1) 前年、過着果や管理不良の園地では、発芽遅れや不揃いとなり作業が遅れがちになるので、適期に行うよう注意する。

4 参考文献

若手園試 大迫試験地 試験成績書(昭和57～59年)

5 試験成績の概要

調査は、同一地域内でほぼ同様の土壌タイプ、樹齢の栽培農家から収量差のある農家を4地区計8戸につき3ヶ年継続調査した。

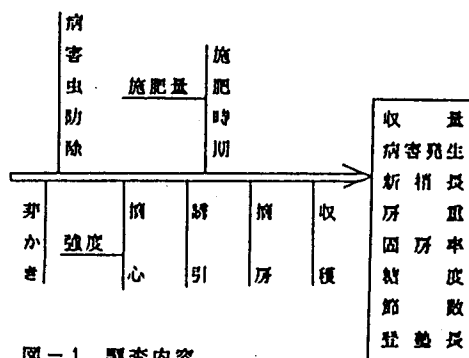


図-1 調査内容

表-1 調査園地の概要

項目 調査園	調査樹齢	54～56年10a 当り平均収量Kg	調査地	地形
1	11	2,500	紫波町 赤沢	緩傾斜地
2	11	1,200	紫波町 赤沢	傾斜地
3	17	1,400	大迫町 亀ヶ森	緩傾斜地
4	17	1,300	大迫町 亀ヶ森	"
5	13	1,900	大迫町 内川目	緩傾斜地
6	11	900	大迫町 内川目	傾斜地
7	11	1,630	大迫町 外川目	緩傾斜地
8	11	900	大迫町 外川目	"

注) 昭和54～56年の収量は農家の聞き取り調査
(農家出荷分)

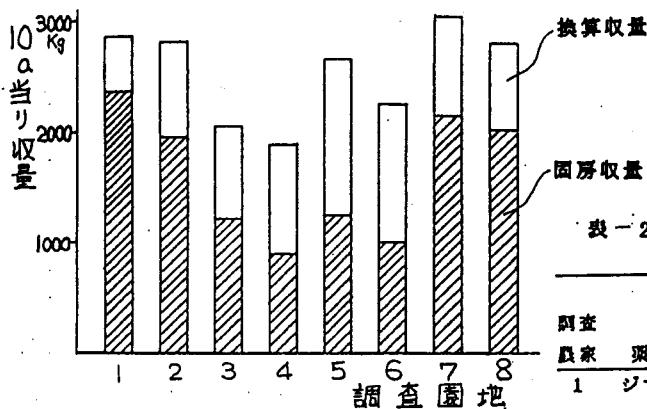


図-2 10a当り換算収量

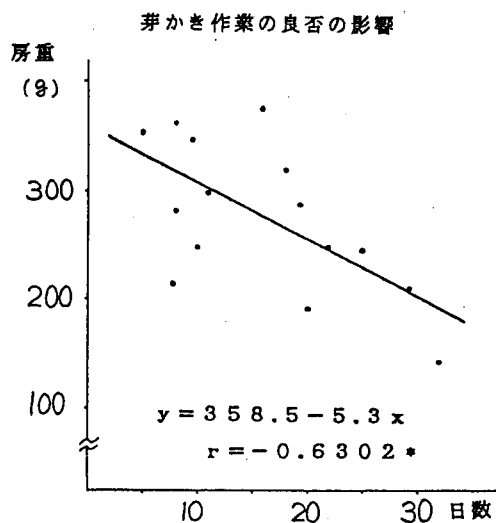


図-3 発芽から芽かきまでの日数と房重 (昭和57~58)

摘心作業の良否の影響

表 3 摘心と房重

摘心の良否	摘心に摘心が行なわれた場合	早すぎる摘心、または無摘心
平均房重	295.5g	272.3g

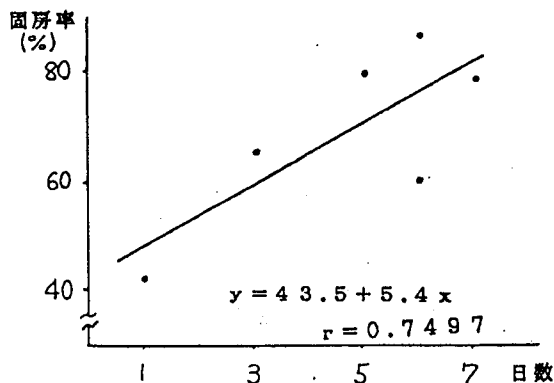


図-5 摘心と固房率 (昭和57)

表-2 昭和58年の晩腐病防除の実態

調査農家	開花第1回目の防除剤	倍率	散布日	発病率 (%)	固房率 (%)	換算収量 kg/10a	袋かけの有無
1	ジマンダイセン	1000	+12	0	81.8	2280	有
2	"	"	+13	0.9	62.1	2360	"
3	オーソサイド	"	+46	87.9	0	1330	無
4	"	"	+45	58.1	0	1240	"
5	ジマンダイセン	"	+4	0	39.1	2240	有
6	"	"	+14	0	32.9	2220	"
7	ビスダイセン	"	+16	0	60.8	3150	"
8	ジマンダイセン	"	+31	1.0	65.1	2380	"

註) *は開花後の日数

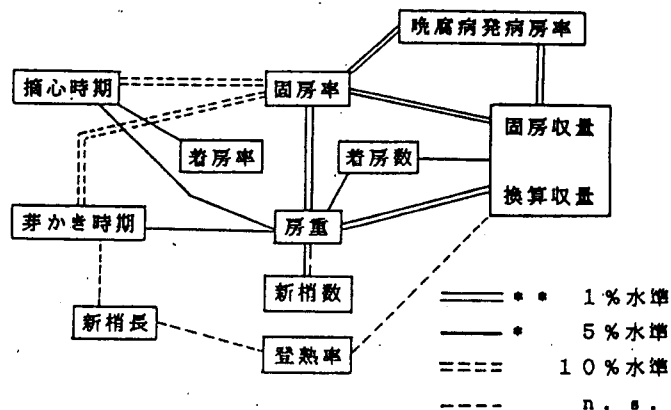


図-4 各要因の単相関

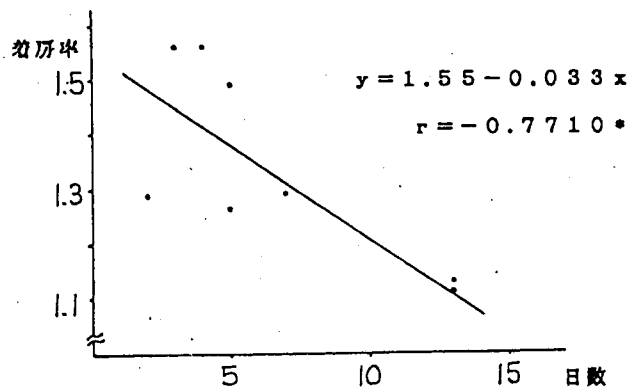


図-6 摘心時期とその後の若房率 (昭和59)